

## 10月7日 年間第27主日

ハバ 1:2-3, 2:2-4    IIテモ 1:6~14    ルカ 17:5~10

### 1. IIテモ

w.7-8 「そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えさせたように勧めます。神はおくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。だから、……むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。」

私たちはここに、教会が叙階の秘跡と呼んでいるものの起源を見ることが出来ます。パウロは主キリストによって召された使徒の一人として、使徒たち一同に委ねられた任務と権能を、さらに按手をもってその後継者たちに受け継がせました。テモテはこの按手によってイエス・キリストに起源する霊的賜物を委ねられたのでした。

このことに関して教会憲章は、“このたまものは、司教聖別においてわれわれにまで伝えられてきている”と解説し、また“新しく選ばれた者を叙階の秘跡によって司教団に入れることは、司教たちの務めである”と述べています(21)。

w.13-14 「キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。」

歴史の中の教会は、使徒たちによる宣教を受け継ぎ継続することによって、その連続性を保って来ました。それはおのおのの時代に叙階される司教の権威が、イエス・キリストに由来するものであったからです。司祭たちはこの司教に従属してその任務と権能に与かる者として叙階され、各地の小教区のミサを司式して神の民に奉仕して来ました。

### 2. ルカ

このテキストが、だれよりも先ず使徒たちに向けられた主イエスの言葉であることに注目しましょう。使徒たちおよびその後継者である司教たち(ならびに司教に従属する司祭たち)に語られた信仰と奉仕に関する主イエスの言葉を、ミサに集まった信徒一同にも聞かせようとしているルカ福音書の意図を、十分に理解する必要があります。いわゆる信徒使徒職と呼ばれるものを、ルカ福音書は叙階の秘跡を受けた役職の延長線上で理解するように、私たちに求めているのです。

この点に関して、昨年末に梅村司教が出された司牧書簡「交わりとしての教会をめざして」は、“すべての信者の交わり”の項の中で信徒の使命について述べて、「神の民全体の有機的な交わり、すなわちカリスマ的であり、同時に位階的な構造を持つ交わりを築くために働くことになる」(p.13)と述べています。

このように信徒の奉仕の使命は、聖職位階に属する司教や司祭の使命と常に深く関わっていることを考

えましょう。

### 3.

ここで本年6月に梅村司教が出された司教教書「終身助祭制度の導入に関して」にも言及しておきたいと思います。梅村司教は横浜教区の現状における優先順位として“信徒の養成”をあげて、今は「終身助祭制度の導入によって新たな教会の位階的構造の強化をはかるのではなく、信徒の養成をもって教会のカリスマ的構造の強化をはかるべき時だということです」(p.8)と語っておられます。信徒の奉仕の使命を、司教や司祭の使命と切り離して考えるのではなく、むしろ同じ主イエス・キリストに由来する任務への招きとして理解することを、今朝のルカ福音書のテキストは私たちに訴えているのです。

### 4. ハバ

ハバクク書はいわゆる職業的預言者に起源するもので、国家の危機に際して国民の士気を鼓舞するために南王国で語られた祭儀的預言であろうと考えられています。

今朝の私たちがそこから聞くメッセージは、“救いは神から来る”ということと、「神に従う人は信仰によって生きる」(v.4)という教えです。

教会という共同体は神が御子イエス・キリストによって贖って(買い取って)くださった民ですから、その宣教も奉仕も主イエス・キリストに由来し、また依存しています。そのことを教会は叙階の秘跡によって今日まで受け継いで来ました。

洗礼と堅信によってキリストの救いの使命に与かっている私たち信者は、「神に従う人は信仰によって生きる」ことを、司教や司祭と共に自分たちへの呼びかけとして聞くことを今朝求められています。聖職者中心主義ではなくて、教会のカリスマ的構造の強化をはかる“信徒の養成”こそが横浜教区の現下の切実な課題であることを、私たち一同で考えて行きましょう。                      アーメン、ハレルヤ。

## 10月14日 年間第28主日

王下 5:14~17    IIテモ 2:8~13    ルカ 17:11~19

### 1. ルカ

主イエスに出会って、10人の重い皮膚病の病人がいやされました。レビ記13章にある通り、彼らはイスラエルの神の御前で、「あなたは汚れている」から「あなたは清い」へと変えられたのでした。

聖書において“汚れている”とは神からの拒絶を意味します。同様に“清い”とは神に受け入れられることです。そのような聖書独自の用語法が、今朝のテキストを正しく理解する鍵になっています。

私たちはこの奇跡物語りに登場するサマリア人のように、異邦人でありながら主イエス・キリストの救いを受けて、共にミサをささげる民となりました。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」(v.19)という主イエスの言葉を、ミサ典礼書の総則はその冒頭で次のように解釈しています。

「ミサの祭儀は、……、キリスト者の生活全体の中心である。……そして、他の聖なる行為とキリスト者の生活のすべての行いはミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている。」(1)

### 2. 王下

アラムの子の軍司令官ナアマン(ルカ4:27ではシリア人ナアマン)のいやしの物語りは、恐らく今朝のルカ福音書のテキストの背景として考慮すべきものです。ナアマンは汚れた民の一人でしたが、イスラエルの神ヤーウェによって清くなりました。このいやしは、かつてはイスラエルの神に拒絶されていたナアマンが今やヤーウェに受け入れられたことのしるしでありました。

「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました」(v.15)とは、決してイスラエルの神ヤーウェがある一地方に限定された神であるという意味ではありません。ナアマンは多くの他の神々の一つにではなくて、正にイスラエルの神ヤーウェのもとに「戻って来た」(ルカ17:18)のだと、王下は語っているのです。ナアマンは言いました。

v.17 「しもべは今後、主(ヤーウェ)以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることはしません。」

### 3.

私たちの神は、主イエス・キリストの父なる神です。この父なる神は旧約聖書の主(ヤーウェ)と同一の方、天地創造から始まって終末の神の国の完成に至る救済史を導かれる神であります。

ですから私たちのミサは、父なる神の救いの御業を主題とし中心として構成されているのです。ミサが“ことばの典礼”と“感謝の典礼”という二つの部分からなっていることから分るように、いわゆる司祭席(内陣)には“祭壇”と“朗読台”という二つの中心が配置されています。祭壇は「十字架のいけにえが秘

跡的なしるしのもとに現在のものとなる場所」(ミサ典礼書の総則 259)であり、朗読台からは神のことばを告げ知らせます(同 272)。信者の注意がこれに向けられ(同 262,272)、他のものにそらされることがないように配慮する(同 278)ことは、最も基本的な注意事項であります。

かつては「あなたは汚れている」と呼ばれていた私たちは、主イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦されて、「あなたは清い」と呼ばれる民になりました。そのような民として、私たち会衆は“祭壇”と“朗読台”を囲んでミサをささげているのです。

ところでカトリック浜松教会のミサの現状を観察してみると、そこには明らかに“これは正常でない！”ことが強引に入り込んで来ていて、「信者の注意が祭儀そのもの(祭壇と朗読台)からそらされる」(同 278)働きをしているように思えます。永年にわたる成り行きの結果として、本来“正常でない”ものがうやむやに容認されてしまっているのです。

そのようなカトリック浜松教会の私たちに向かって、今朝のミサで神は、アラムの王の軍司令官ナアマンの物語りを通して、また神を賛美するために戻って来たサマリア人の話を通して語りかけておられます。それはある特定の一人二人に対してではなくて、共にミサをささげている私たち一同に向かってなのです。私たちみんなが「キリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。」(II テモ 2:10)

ミサ典礼書の総則が述べている次のような言葉が、浜松カトリック教会のミサの中に活かされることは、私たち一同にとってのこれからの課題なのですから。

「実に、ミサの中にキリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点があり、また人々が、神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点がある。」(1)

「祭儀全体が、信者の意識的、行動的、充実した参加を促すものとなるように整える必要がある。」(3)

アーメン、ハレルヤ。

## 10月21日 年間第29主日

出 17:8～13    IIテモ 3:14～4:2    ルカ 18:1～8

### 1. ルカ

「気を落とさずに絶えず祈る」(v.1) ことを、今朝の福音の日課は教えています。ルカ福音書がこの譬え話で語っている第一のことは、主イエス・キリストが再臨して神の国を完成してくださる日まで、神の民である教会は祈り続けて行くのだということであり、そして第二のことは、“祈りは聞かれる”という信仰を励ますことでもあります。

いろいろな種類の祈りの中で、私たちの主日のミサは“教会共同体による公の祈り”の第一のものですから、これに目を向け、これを手がかりにすると、今朝の三つの朗読聖書から語られる神のことばが明らかになって来ます。

もちろん信者各自の個人的な祈りも大切なものです。公の祈りがそれに与かる信者一人一人の個人的な祈りを養い、また個人的な祈りのレベルにまで深められるなら、それは教会がよりよく造り上げられて行くこととなります。

### 2. IIテモ

教会共同体による公の祈りであるミサは、“ことばの典礼”と“感謝の典礼”という二つの中心を持っています。この二つは長円の二つの中心のように理解するのが正しいのです。

第二バチカン公会議以前には、この二つを同心円のように理解して、“ことばの典礼”は“感謝の典礼”への前段であり、さらに感謝の典礼の中の“交わりの儀”を中心にしてミサ全体が成り立っているというような説明もあったと聞いていますが、それが正しくないことを典礼憲章は明確に示しています。

“とばの典礼”によって神のことば(キリストの福音)が宣教されるということ、教会は初期の頃から大切に考えて来ました。

vv.1-2 「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ、厳かに命じます。御言葉を宣べ伝えなさい。」

“御言葉”とはキリストの福音のことであって、代々の教会は正にそれを宣べ伝えることによって自ら教会であり続けて来ました。それはかつてナザレのイエスが語った“あの言葉この言葉”のことではありません。そうではなくて、十字架につけられて死に、復活して天に上げられた主、やがて終末の裁き主として来られ、神の国を完成される“私たちの主イエス・キリストについての福音”です。

“ことばの典礼”は“感謝の典礼”と並んでミサの中心の一つです。公の祈りであるミサには一つの中心ではなくて二つの中心があるのです。このように“祈り”が“福音の宣教”と固く結びついていることを理解しましょう。“祈り”が公のものであれ個人的なものであれ、“福音の宣教”から切り離されて主観的、人間的、世俗的なものになってしまうことは、教会にとっても信者一人一人にとっても危険なこと、教会共

同体の崩壊に通じることだからです。

### 3. 出

ミサの中には信仰宣言や共同祈願があり、また集会祈願、奉納祈願、拝領祈願があります。そして何よりも感謝の祈りと呼ばれる奉献文はミサ全体の頂点です。司式者の祈りがあり会衆の祈りがあります。しかしミサはその全体で一つの祈りなのであって、朗読者や詩編唱者、聖歌隊やオルガン奏者も、それぞれの役割によってこの一つの祈りを支えているのです。

モーセの手を支えたアロンとフルのように、私たちの主日のミサはこれに参加するみんなによって支えられて公の祈りとなります。モーセが手を上げているということに、呪術的な力があつたと考えるべきではありません。そうではなくて、御自分の民を愛してこれを助け導く神が、ここではモーセが手を上げ続けることを望まれたということです。そのように、御自分の民である教会を御子の血によって買い取られた神は、私たちがミサによって公の祈りを続けて行くことを望んでおられます。

主の祈りの中で「み国が来ますように」「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます」と祈るのは、決して人間の熱心な祈りによって神を動かすためではありません。そうではなくて、私たちに約束された神の国を受け継がせてくださる神が、かの日(II テモ 4:8)に至るまで教会がそのように祈り続けることを望んでおられるのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 10月28日 年間第30主日

シラ 35:15b-17,20-22a    II テモ 4:6-8,16-18    ルカ 18:9~14

### 1. ルカ

v.13 「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」

私たちはミサの開祭の部で、必ず“あわれみの賛歌”を歌います。これは信者が主に呼びかけて、そのあわれみを願う歌であって、賛歌というよりは極めて単純な会衆の祈りです。私たちはこの歌で、ルカ福音書の中の譬え話に登場するこの“義とされた徴税人”の姿に自分自身を重ね合せます。

この歌が毎主日のミサで繰り返し歌われるように、この“憐れんでください”という祈りはキリスト者の生涯を通じての祈りです。私たちの人生のいろんな場面で、困難や苦しみの中でも、喜びや感謝の中でも、いつもこの祈りはこだましています。そして「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る」(黙 1:7) その日にも、私たちキリスト者はこの祈りのうちに再臨の主をお迎えすることでしょう。

### 2.

ローマ典礼がラテン語で行われるようになる以前から、“主よ、憐れみたまえ”がギリシア語で歌われていたために、この歌はそのままの形で残りました。しかし、“キリエ・エレイソン”(主よあわれみたまえ)、“クリステ・エレイソン”(キリストあわれみたまえ)、“キリエ・エレイソン”の順に歌う形式に落ち着いたのは8世紀頃と言われています。

元来“キリエ”とは主キリストのことであって、“主”はパウロの頃から好んで使われたキリストの呼び名であります。この歌を三位一体に結びつけて説明する解釈が9世紀以降に流行しましたが、それがこじつけに過ぎなかったことが典礼刷新の過程で明らかにされました。第二バチカン公会議による典礼刷新に重要な貢献をした人で、典礼憲章の起草やその後の各種典礼儀式書の規範版の編集にも関わったユンクマンという司祭が、その著書“ミサ”の中で次のように言っています。

「彼(キリスト)は自分の祝いごとの始めに呼ばれる。いわば自分の名で呼び集められる集會に、招き入れられるようなものである。」(邦訳 p.204)

### 3.

“あわれみの賛歌”は、最初に聖歌隊(または先唱者)が一回歌って、それから会衆一同が応唱します。この応唱は「通常、二回繰り返される」と規定されていますが、それでも回数を増やしたり短い句(トロープス)を加えたりすることも同時に認められています。(ミサ典礼書の総則 30)

大切なことは、ミサの中の殆どの歌が“会衆一同の歌”なのだという理解です。役割は異なっても、聖

歌隊も本来「信者会衆の一部であり」(同 274)、「歌による信者(会衆)の行動的参加を促進すること」(同 63)がその務めです。さらに、「聖歌隊について述べられることは、守るべきことを守ったうえで他の演奏者、とくにオルガン奏者についてもあてはまる」(同)と解説されています。

浜松カトリック教会のミサで、オルガンの音と聖歌隊の歌声が果たしている役割を、もっと大切に考えることが、現下の課題であることを指摘しておきましょう。

#### 4. II テモ

使徒パウロはローマの獄中であって、間もなくその生涯を終えようとしていました。彼に死刑を宣告する裁判に先立つ「最初の弁明」が終わったところでした。彼の弁明はここでも“福音の宣教”そのものでした(v.17)。迫り来る殉教を思い、「今や、義の栄冠を受けるばかりです」(v.8)と語る使徒パウロの心の中で、“キリエ・エレイソン”がこだましていたことでしょう。

そして彼の残した手紙の断片(と思われるもの)を読む現代の私たちの心の中にも、同じ“キリエ・エレイソン”がこだまするのです。私たちが洗礼の秘跡によって“義とされた”日から、やがて共に「義の栄冠を受ける」終わりの日まで、私たちの生涯に“キリエ・エレイソン”の歌声が絶えることはありません。

アーメン、ハレルヤ。